

今年度4回目の避難訓練を実施しました

今年度4回目の避難訓練を、2月2日(金)に実施しました。今回は火災に備えての避難訓練でした。

16時30分に火災が発生したことを想定して、「おはしも」の約束(押さない、走らない、しゃべらない、戻らない)を守りながら、避難しました。

その後、消火訓練をしましたが、今回も、職員だけでなく、代表の児童も消火訓練の体験をしました。前橋北消防署の方にも指導していただきました。



【児童は、静かに、迅速に避難できました】



【消火訓練や消防署員の講話にもしっかりと臨めました】

本日(2月16日)の配付物について

本日、以下のような配付物がありますのでご確認ください。

(1) 春休み利用関係書類

- ①春休み期間ご利用申込案内 ②春休みのしおり ③明和児童クラブ利用予定表
④3月・春休み期間利用料金表 ⑤休会願(長期会員のみ)

春休み利用の申込締切は、2月27日(火)です。期日厳守でお願いします。

(2) 保護者説明会案内 = 「令和5年度保護者説明会について(ご案内)」

3月9日(土)開催の保護者説明会のご案内です。「令和5年度保護者説明会の参加について」の用紙を3月1日(金)までに必ずご提出ください。参加人数の把握が必要なためです。なお、退会予定者には配付しません。

子育てのあれこれ No.24

(文責＝鷲頭)

子どもは、年齢を重ねていくに連れ、競争社会の厳しさに立ち向かっていかねばなりません。そこで、アドラー心理学の研究者の**岸見一郎氏**が、「アドラー心理学 シンプルな幸福論」で、「競争」について述べている部分があるので、次に紹介させていただきます。なお、要点と思われるところを勝手に太字にさせていただきました。

アドラーは、また、「他の人が君より上手だからといって心配することはない」といっています。今の社会においては、自分を他人と比べ、競争することが当たり前のように思われていますが、**アドラーは競争することを当然のことだとは考えていません**。競争は、他者を仲間と見ることを困難にし、それゆえ、他者に協力し、貢献させないようにします。他の人よりも自分が優れていることを誇示するために動こうとする人や、競争することで、他者から認めてもらおうとする人は、他の人に貢献することだけを考えている人とは違って、他の人に関心がなく、自分にしか関心がありません。また、社会全体を見れば、競争に勝つ人がいるということは負ける人もいるということですから、社会全体としてはプラスマイナスゼロということになります。どんな対人関係においても、競争に負けた人だけが、精神の均衡を崩すことになってしまい、精神的な健康を損なうこととなります。見逃すことができないのは、それでは**競争に勝った人が精神的に安定しているかという、そうではないということ**です。敵に勝てなければ、そしてずっと勝っていなければ安心できないからです。そのような人にとって、他の人は敵で、この世界は危険な世界です。**本当に優れている人は自分が優れていることを証明する必要はありません**。証明しなければならぬと思っている人は、本当は自分は優れていないのではないかと、思っています。しかし、どんなことに対しても、証明する時は行きすぎることとなります。

他の人をいわば蹴落として、自分だけが幸福になることはできない、というのがアドラーの基本的な考えです。自分さえよければいいと思ったり、自分が優れていることを他の人に誇示したり、そのためには結果を出すことだけが重要だと考えるのは問題でしょう。困難に立ち向かい、それを切り抜ける力ではなく、目に見える成功のほうに関心がある人は多いように思います。しかし、アドラーもいうように「ほとんど努力することなしに手に入れた成功は滅びやすい」（『子どもの教育』）なのです。

また、同じアドラー心理学の研究者の**星一郎氏**は、「アドラー博士の子どもを勇気づける20の方法」の中で、「子どもは、他人との比較ではなく、自分にしかない資質に注目されると勇気づけられる」と述べています。そして、「他人との比較ではなく、子どもの過去と比較して成長を認めてやる」ことが大事であると、次のように事例を紹介しています。

私の知り合いのあるお母さんは、小学生のお子さんが二人いて、上は五年生で比較的勉強ができるほうなのですが、下の子は三年生で、どちらかといえば勉強が苦手なほうだということです。

あるとき、この下の子が学校の算数のテストで六十点をとり、喜び勇んで家に帰ってきてお母さんに「お母さん、みてみて。ホラ、僕テストで六十点とったよ」とみせると、そばにいたお兄ちゃんが、すかさず「おまえ、六十点ぐらいで自慢するんじゃないよ」といったのだそうです。こんなとき、お兄ちゃんと同じようにお母さんも少なくないと思います。「六十点くらいじゃぜんぜん自慢にならないわね、自慢するんだったら九十点くらいはとらなくちゃダメじゃないの」と。

でも、この兄弟のお母さんは、お兄ちゃんに向かって、「そうじゃないのよ、〇〇ちゃん(弟)にとってはすごくいいのよ。いつも四十点くらいだったのに、それを頑張って六十点とったんだから、〇〇ちゃんにとってはすごい進歩なのよ。できる子なら六十点くらいでは喜ばないでしょうけど、この子にとっては二十点も上がったのがすごくうれしいの。それでいいのよ。〇〇ちゃん、よく頑張ったね」といったそうです。アドラー心理学の考え方からいえば、このお母さんの子どもに対する接し方は模範的といっていでしょう。



(参考文献) 「アドラー心理学 シンプルな幸福論」(岸見一郎)、「アドラー博士の子どもを勇気づける20の方法」「アドラー博士が教える『失敗に負けない子』に育てる本(星一郎)、「生きづらい時代の幸福論」(諸富祥彦) 他